

山行NO NO. 1802-1
日時 2018.06.30(土) 濃霧
山域 北海道・アポイ岳(810m)
コース アポイ岳ビジターセンター6:23-避難小屋7:29-分岐-アポイ岳8:37-幌満(ほろまん)お花畑9:01-分岐-避難小屋10:12-ビジターセンター11:08-とよめか荘16:09(泊)
標高差 上り ビジターセンター約70m~アポイ岳810m=約740m
下り //

ヒダカソウは遅かった

2018・北海道遠征で最初の山。

ビジターセンター駐車場から出発。雨は降っていないが、山は深い霧。

津軽海峡半ばまで晴れていたが、北海道は霧雨だった。

苫小牧からここまで陸路147kmは長い。途中、日高のサラブレッド銀座があった。牧場では、馬の親子が草を食んでいた。



馬の親子

道内の若い衆、4名がやって来た。トイレはウォシュレット完備。

感じのいい自然林を上る。避難小屋まで、概ねトラバース。

小屋は立派で宿泊も出来る。ただ、トイレはない。あるのは携帯トイレが使えるブースだけ。

この件は、下山時、地元の関係者と会った時、話をした。

1. 携帯トイレは、ビジターで販売だが、早朝は閉まっているので購入出来ない。
2. そもそも、ブースのPRが全くないので、購入する方は少ない。
3. 近くのコンビニ・商店で携帯を販売した方が良い。など。

関係者は善処します、とのこと。



避難小屋

避難小屋から急登が始まる。

岩混じりに尾根をグングン上る。花は春花は既に終わり。現在、端境期で夏花に移行中。一番目立ったのはキンロバイだった。8：37頂上着。小さな祠があった。相変わらずの深い霧で展望はなし。



キンロバイ

下山は、お花畑があるという「幌満」に下る。20分程で着いた。5月上旬、「ヒダカソウ」が見られるが、現在は少ないらしい。原因は盗掘とハイマツの侵入と看板にあった。

珍しい花は、

エゾリムラサキだった。本土のミヤマムラサキに似ていた。

ほか、アポイ固有種の、エゾコウゾリナなど。ここからトラバースで分岐に戻る。オジサンが2・3名やって来た。皆さん、花の情報を聞いてくる。

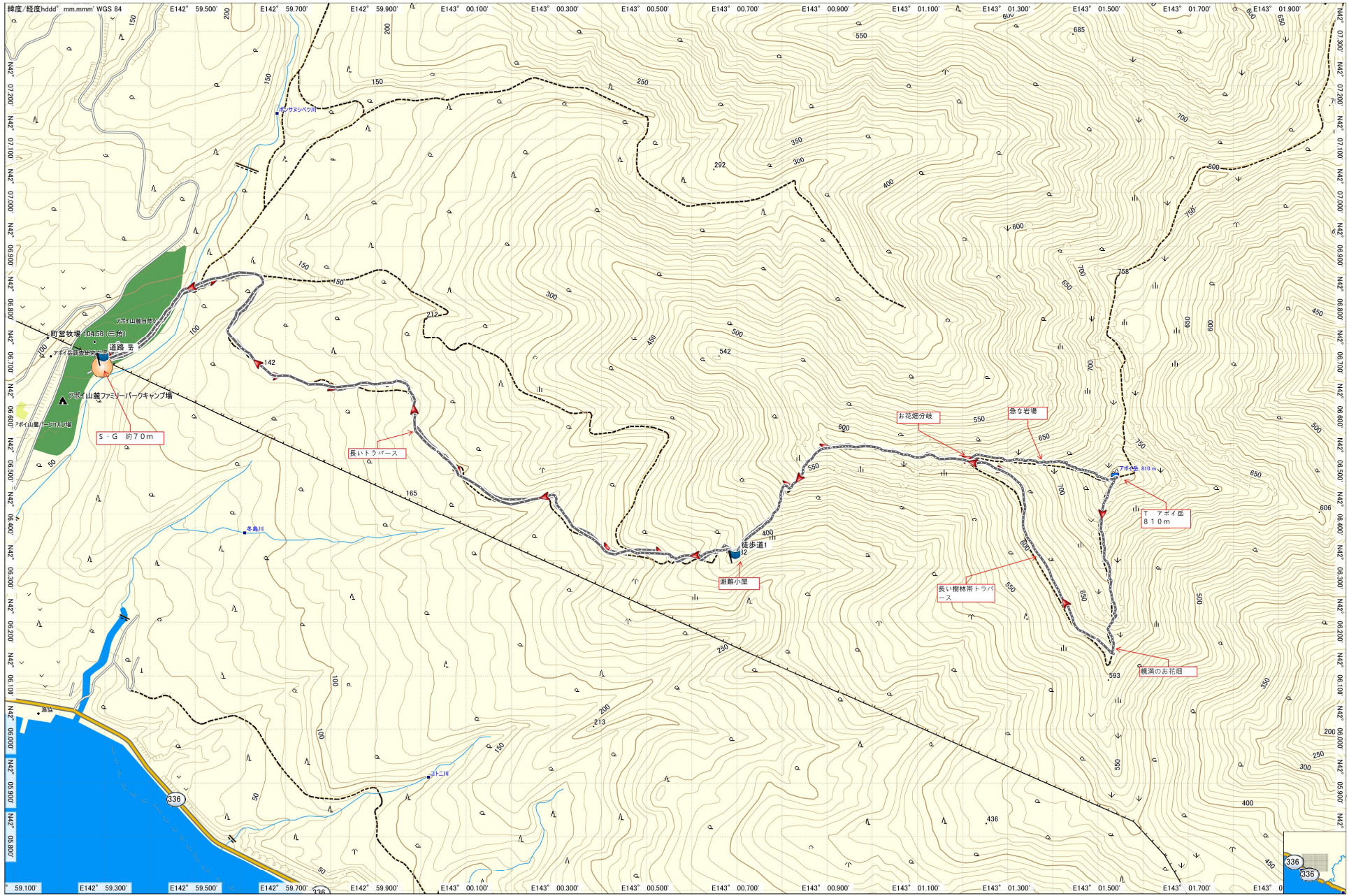


エゾルリムラサキ

小屋に戻り小食。ラーメンとビアを頂いた。下から沢山上って来る。
中には随分軽装で、サンダルみたいな方もいた。観光者だろう。
11:08 駐車場着。次の目的地、幌尻に向かう。



アポイ環境整備関係者の方



Japan Topo 10M Plus V3
Copyright © 2018 Garmin Ltd. All Rights Reserved.

2018/07/07 18:05:04

GARMIN

山行 NO NO. 1802-2
日時 2018.07.01 (日) 大雨
山域 北海道・幌尻岳 (2052m) 額平川途中まで
コース 第二ゲート—林道終点—額平川途中・引き返点6:15—林道—とよぬか荘 (素泊)
標高差 上り 林道終点約750m~額平川途中約900=約150m
下り //

文・写真 TG

幌尻岳、2年連続の敗退

昨夜は、「とよぬか荘」泊。廃校跡。一泊二食=4200-、素泊り=3000-、大きな風呂あり、寝床は簡易ベット、夕食は二種類。野菜炒めとマトン焼肉。空いていれば、当日でもOK。全体的に親切。ただ、若い女性の係りは、天気予報を把握していなく、やや情報サービスに欠けていた。

朝起きたら雨だった。今夏、幌尻岳はこの日が山開き。小屋も同じ。登山者は我々と単独の兵庫のオジサン (72歳)、ツアー団体10名のみ。バスは3時発。前日、雨の場合、バスが出ない時があると、とよぬか荘管理人に「脅かされたが」良かった。バス添乗員は、饒舌な方で世間話をいろいろしてくれた。林道で去年は熊を何回か見た。戦時中は、マンガンの探掘で大きな集落があり、学校もあったと教えてくれた。林道を1時間走り、第二ゲート着。ここから登山開始になる。

雨は相変わらず続いていた。約3H歩き林道終点着。本来はもう少し行けるが、今春、終点付近の橋が流されここから再出発になる。すぐ、最初から渡渉。これまでの雨と今日の大雨でかなりの増水。結局、小屋に向かったのは、小屋管理人と我々、兵庫のオジサンのみ。ツアー団体は、ここで退却。

1H程、右岸を進むと、本格的な渡渉となった。川は更に増水し股下まで浸かる。小屋番も「水が多い」といった。何回か渡渉をして、アルミの橋を渡った。この上が厳しかった。ちょっとしたヘツリを終えた上が最悪だった。へそ上まで水に浸かるとモーレツに冷えた。水が冷たいのだ。

小屋番は、太く長い棒を巧みに使い渡り切った。この流れだとストックはオモチャで用を足さない。余りの増水で危険を感じ、ザイルを出し、対岸の小屋番に投げた。ザイルで兵庫の方をやっと渡した。オジサンは身長がないので、胸下まで浸かり、途中、危ないバランスだった。ザイルがなかったら、流されていただろう。

小屋番は、「帰るなら、ここしかない」と、冷たく言った。(笑い)
小屋まで約1H、まだ数回渡渉があると言う。去年はここで3名流され亡くなっている。我々だけなら行けないこともなかったが、兵庫の方を見捨てることは出来ない。また、無理は出来ない。ここで断念し小屋番と分かれ下山。下りは、いくらか楽だった。

途中、樹木に付けられた、熊の爪跡を見たり、無事、林道着。
ザンザン降りの中、長い歩きで第二ゲート着。
ここには10畳ほどのプレハブがある。
ドアを開けたら、ツアーの方がバスを待っていた。しばし交流。
バスで再び「とよぬか荘」着。ストーブをガンガン炊いて貰い、装備を乾燥させた。

これで2年連続、幌尻は敗退。ま、長い山人生では、こんなこともある。花に拘らなければ、昨年同様、天気が安定する8月がお勧めですね。



厳しい渡渉（兵庫の方）



流された林道終点の最初の渡渉（後方に撤退のツアーの方）



途中のアルミ橋

山行NO NO. 1802-3 文・写真 TG
日時 2018.07.02 (月) 曇りのち雨
山域 北海道・芦別岳 (1726m)
コース 山部貯水池登山口7:10-鶯谷(覚太郎コース分岐)9:10-半面山9:45-池塘-
雲峰山-雪溪-芦別岳11:04-雲峰山(昼食)-半面山-登山口14:07
標高差 上り 登山口約325m~芦別岳1726m=約1401m
下り //

雪溪を越えて鋭峰に上る

北海道には、「深田百名山」が9峰ある。しかし、昨年上った、夕張岳(1668m)も芦別岳も百名山ではない。私は53年・1800回登山をしているが、深田百名山はそれほど興味はないし、全て上っていない。だが、夕張岳も芦別岳もイイ山だ。深田は選定に辺り、大いに悩んだだろうが、そもそも、北海道で9峰は無理がある。百名山コレクターが、仮にこの両峰を上っていなかったら、大きな忘れ物をした、ということだろう。

天気は曇りだった。貯水池駐車場から登山。宮城NOの単独の67歳の方と交流。労山の盛岡山友会の方だった。単独で北海道を長期で上っているようだ。動物除けの鉄製の扉を開けて上り出す。湿気が酷く、モーレツに暑く、汗が滴り落ちる。鶯谷まで2H50のコースだったが、2Hで上った。ここで大休止。



登山口の扉

ここから半面山は、綺麗な白樺林が続いた。右手から涼しい風が渡って来た。目を凝らすと、ガスの合間に雪溪が見えた。渡る風が涼しいのは、このためだった。反面山と雲峰山のコルには池塘が広がっていた。水芭蕉が咲いていた。仰げば、芦別山が雲間に確認出来た。幾つもの雪溪が認められた。そういえば昨日、とよぬか荘で、地元のガイドと思しき方が、「雪溪がある」と言っていた。万が一があるので、今回、簡易アイゼンは用意した。池塘を越えると、いよいよ花が出て来た。中でも、エゾイチゲ・エゾキンバイ・オオバキスミレ。シラネアオイは素晴らしかった。やっぱり、天候のリスクを負わないと、イイ花は見られない。



エゾキンバイ



エゾイチゲ



雲峰山から芦別岳

上からガイド登山の方、5～6名降りて来た。

ガイドは、地元も方ようだ。肩からザイルを下げていた。

<http://www.nekoyanagiyama.com/>

現在は、便利な世の中で、一人＝5000－程度でガイドを引き受けてくれるようだ。

雲峰山を越えると芦別岳が迫って来た。

雪渓を抱えた立派な山だった。ここでも上からガイド登山のオバサマ方が降りて来た。

昨年の夕張岳の話をしたら、「明日雨でも、絶対に行く」と頼もしい宣言だった。

ガイドに花の名称を確認した。フレンドリーな方だった。

頂上に迫る。

下の雪渓は急だが大きなバケツ（踏み跡）があり問題なし。

上の雪渓は、やはり可なり急だが、脇の草付きを上った。

ここは積雪期は厳しい山と予想出来た。

岩場を越えて岩の頂上に立った。何も遮るものが無い絶頂だった。

北・西面は、まだまだ雪が多かった。

本州なら、3000m級の山だろう。



下の雪渓

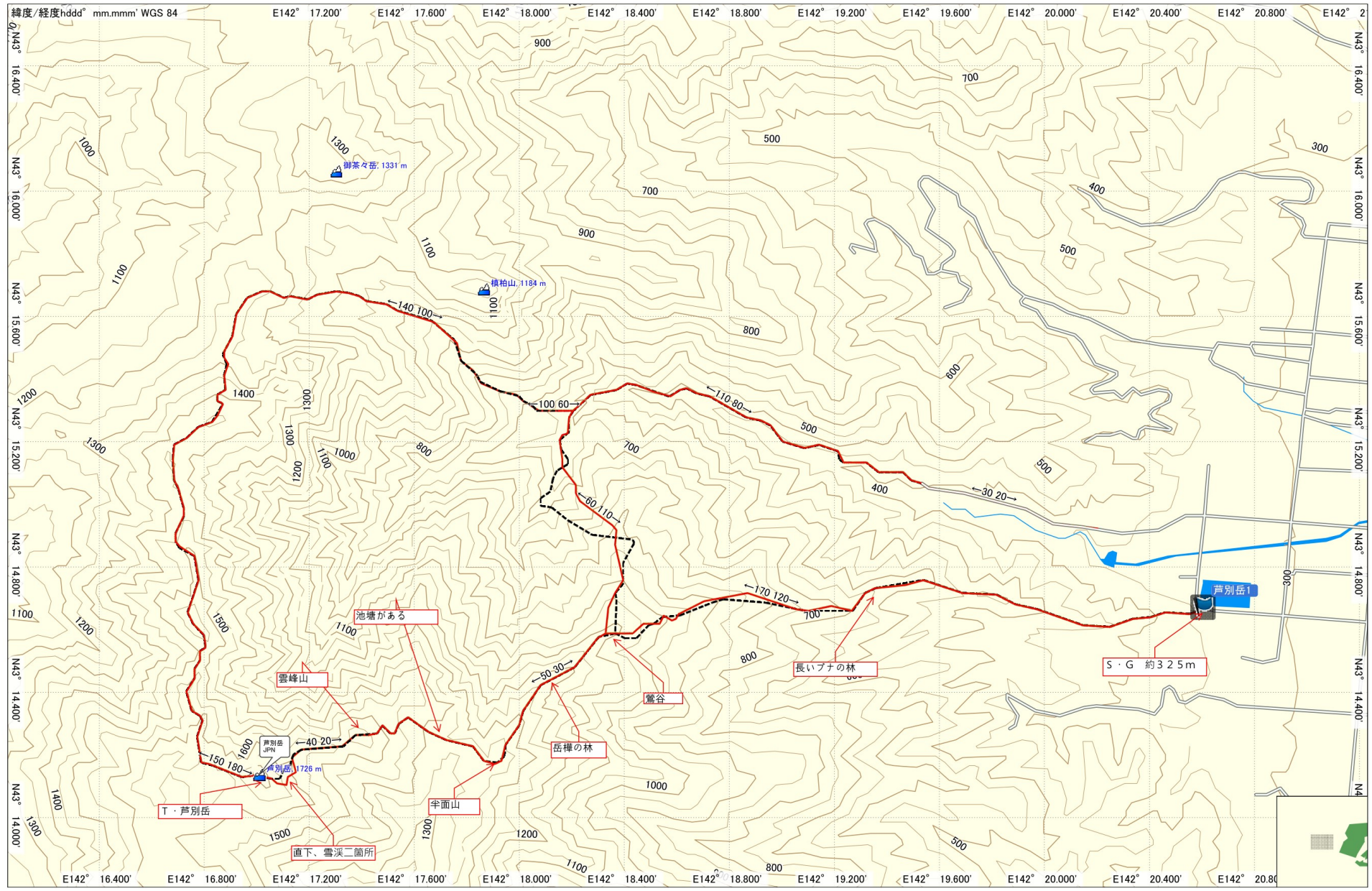


芦別岳頂上

コースタイムは5Hだったが、4H掛からなかった。風が強く寒いので即、下山。
盛岡の方が上って来た。聞けば、私より若かった。
雲峰山で昼食。何故かピアを忘れた。

下りも花を楽しんで行く。
反面山辺りで、また雨がパラパラして来た。台風も来ているので、
明日からも、好天は望めそうもない。
鶯谷から更に下ると、先ほどのオバサマ方がまだいた。
商売とはいえ、ガイドも大変である。

貯水池に降りて、公園で装備を洗った。
明日からの行動を考えた。好天が来れば、幌尻に戻りたかったが、増々悪くなるだろう。
今回は幌尻は諦め、本州に向かうことを決定。本州は少しはイイだろう。
その為に大洗のフェリーはキャンセルし、代わりに青函フェリーを予約する必要がある。
ただ、本州に渡る前、少し気になる山も上りたかった。
何処にするか?? 気になる山は、道南の北海道(大沼)・駒ヶ岳(1131m)。
ここは、見事に秀麗な山だった。



山行NO NO. 1802-4 文・KN 写真・TG
日時 2018.07.03(火)曇りのち雨
山域 渡島半島(大沼)駒ヶ岳(1131m)
コース 赤井川登山口9:20-昭和4年大噴火口10:27-頂上溶岩ドーム・最高到達点1060m-昼食-登山口14:30-青函連絡船-青森
標高差 上り 赤井川登山口約485m~溶岩ドーム最高到達点約1060m=約575m
下り //

地球の子宮が露わに見えた！

今日は渡島半島にある狩場山への移動日だ。道央にある芦別岳から高速に乗ったが、相変わらず雨はポチポチとウィンドガラスを叩きつけている。車中では、明日も雨なら山は断念して函館から青函連絡船に乗って青森から南下して帰ろうと話が決まった。が、走るにつれ雨足が遠のき時折高い山が見え隠れし始めた。大沼公園という標識を見ると、「此処にはいい山があるんだ。雨もないしイッチョ登るか〜」と、CLの一言で渡島(大沼)駒ヶ岳に登る事になった。

高速をおり、カラマツが目立つ分譲地をひたすら走り、森林限界を超えた火山灰剥き出しの裸地に車を止める。薄曇り。頂上は全くのガスに包まれていた。駐車場にはやはり今着いたばかりの車が2台。登る準備を始めていた。「さあ！雨が降らないうちに登ってしまおう！」右手首を痛めた私は、何事にも段取りが遅く、支度もそこそこに歩き始めた。富士山のガレ場に似た登山道は、火山特有の軽石の多い赤茶けたザラザラ道で滑って登りにくい。又、直線的に上に続く登山道も珍しい。ストックが上手く使えない私は直ぐに遅れ始めた。「何をしている！遅いぞ！」とCL。「そう言われてもなあ。手首が痛いもんでねえ・・・」心の中でぼやきながらも歯を食いしばって登る。景色など何も眼中に入っていない。何時もはかかない汗が額からポタリポタリと滴り落ちる。



赤井川登山口

9合目の標識に「ええー！何ほも歩いてないのにもう9合目？〜」これで救われた。ホッとして後ろを振り返ると、大沼湖から緑豊かな森林、町並みが際限なく雄大に広がっていた。深くえぐれた登山道をガスに包まれた山頂を目指して暫く登ると馬の背脊。「山頂は□の標識」があり、一般者のご遠慮下さいとある。此処は頂上ではないのか。周辺は草原のような感じで水平に遠望が広がっていた。⌒岩につけられた矢印に従って火口原の方向に進む。段々と上のガスが切れ左手に円山が見えた。道の両脇には、イチヤクソウの群落、ゆるゆると歩いていくと、突然目の前に切れ落ちた火口の亀裂が

飛び込んできた。地球の息吹を感じさせる素晴らしい圧倒的な迫力で！暫し感無量！！
風が強く、身体が煽られて長くは居られない。ガスで隠れて見えない頂上は何処だ！火口脇から伸びている山は砂原岳？手前に猛々しい山がガスの中にチラッと見えるけれどその山？



昭和4年の噴火口

今回、此処へ来るはずもなかった山なので手元には何も資料がない。登山道を外れてそれらしき山を目指して進む。誰も踏み込まないのか土がふかふかして足のバランスが悪い。地割れがいく筋も走り奈落の底が口を開けていた。覗き込んでみたが底が見えず背中に寒気が走る。おおーこわ！



大クレバス

取り敢えず馬の背の登山道に戻り、新たに丸山の先にチラッと見えた岩峰が剣が峰とあたりをつけ目指す事にした。道は踏み後程度。ザレ場には透き通るような絨毛に包まれたイワブクロがビッシリ！そこかしこに芽を出し、歩かれていない道だと示していた。登山禁止とは表示されていないが、一般者はご遠慮下さいが功を奏しているのか。丸山を過ぎ更に上を目指す。勾配がきつくなり道もなくなった。これから先は岩稜だ。ルートは多分あるだろうが、私たちも此処で終りにする。ガスの切れた下界の風景を楽しみながら下り、馬の背で休憩していると雨足がやってきた。本降りの前に車に戻ろうと、すっとな飛びで駐車場まで。今日も昼から雨にあたってしまった。予定外の山だったが、なかなか良い山で大満足でした。



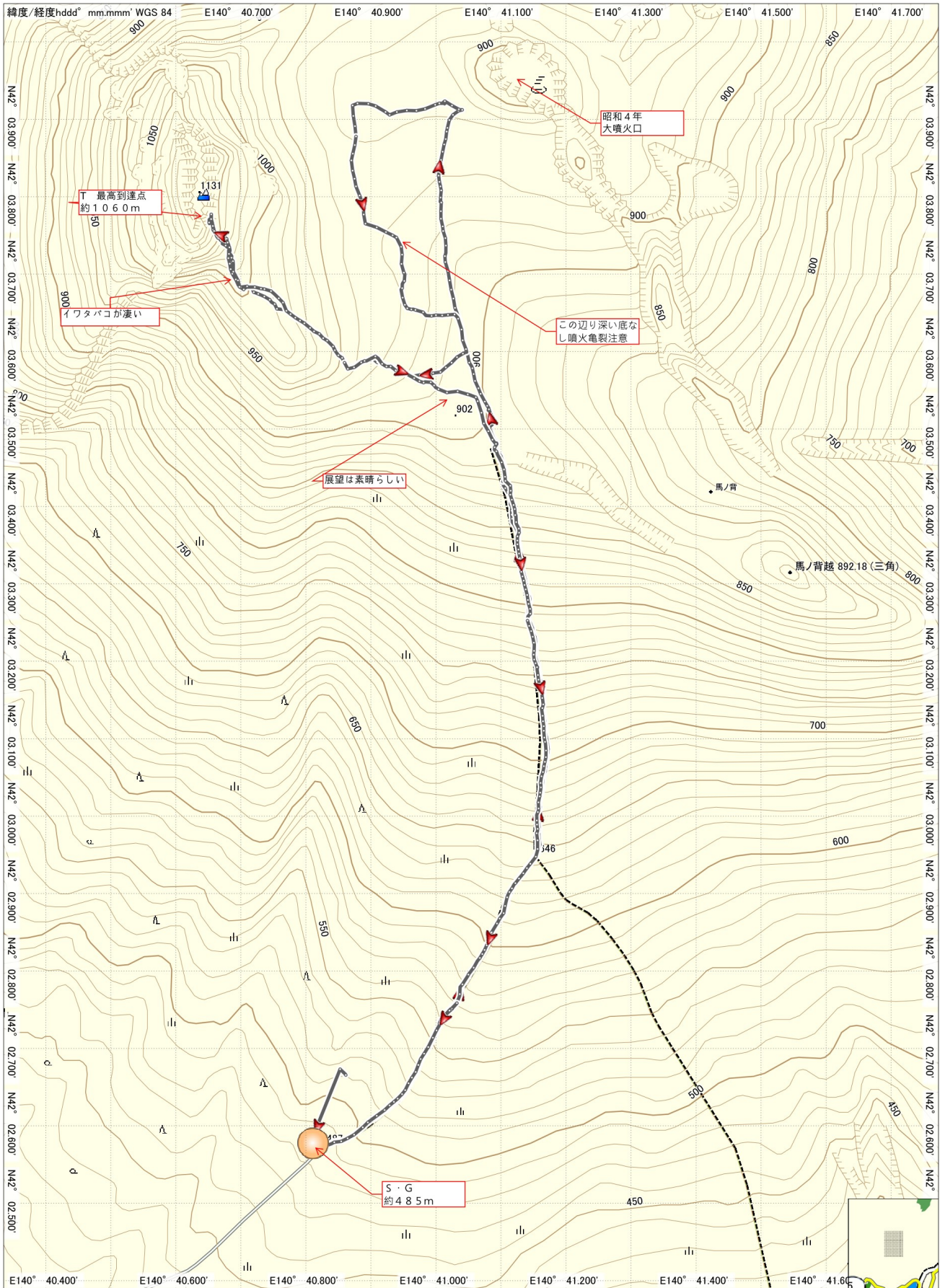
(ネットから)



イワブクロ



頂上方面



Japan Topo 10M Plus V3
 Camshaft/Maple Co., Ltd. 2014
 Garmin Corporation 1995-2014

マイコレクション

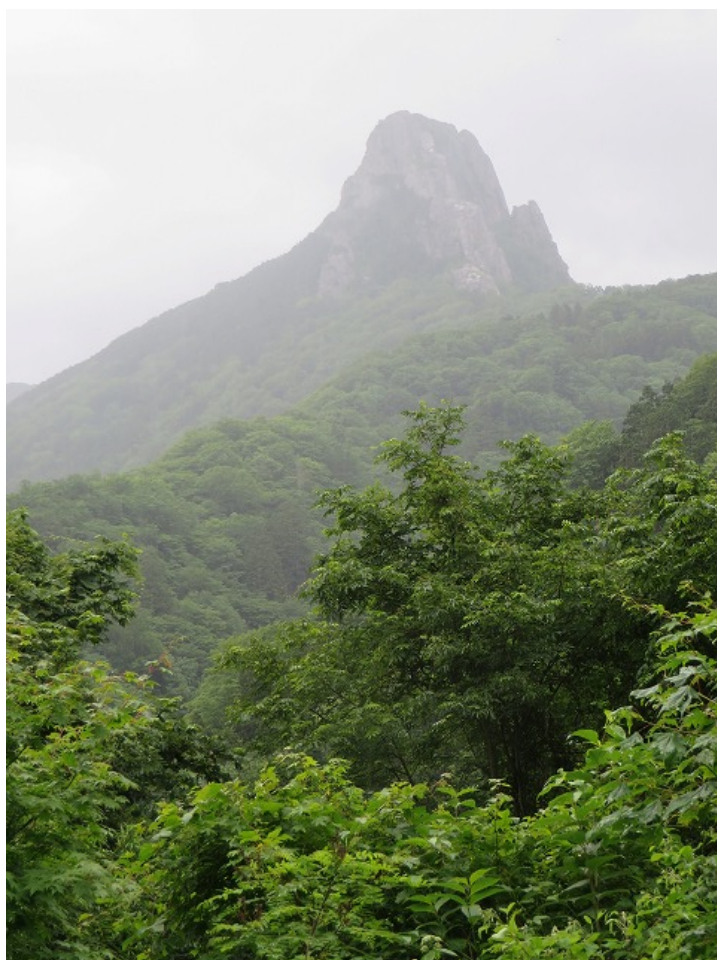
GARMIN

山行NO NO. 1802-5
日時 2018.07.04(水)曇りのち雨
山域 下北半島・縫道石山(ぬいどういしやま・626m)
コース 恐山—大間—仏ヶ浦—海峡ライン分岐—登山口—青森
標高差 上り なし
下り

文・写真 TG

下北の怪峰を訪ねる

恐山に寄る、大間でマグロを食べ、遠路、下北半島の西端、縫道石山を訪ねたが、登山口でまたまた雨。雨はいささか、ウンザリ・ガッカリでやる気は失せ、青森の友人宅に向かった。



大石沢付近から縫道石山



大間のマグロ

山行 NO NO. 1802-6 文・写真 TG
日 時 2018. 07. 06 (金) 曇・モーレツな風
山 域 北上山地・五葉山 (1351m) 黒岩コース
コース 桧山登山口—林道—大沢コース合流—黒岩—五葉山神社—五葉山—五葉山神社—あすなろ山
荘分岐—あすなろ山荘—林道—登山口
標高差 上り 桧山登山口約725m～五葉山1351m＝約626m (ただし長い)
下り //

シャクナゲの海・海・海・海に感嘆

青森から好天を求め更に南下。

しかし天気は相変わらずハッキリしない。早池峰の案もあったが、結局、未踏の山を選ぶ。五葉山は気になっていた。特に今流に言えば、「シャクナゲ、半端ない」山だった。

桧山林道を上り登山口着。

林道を上らない下からの黒岩コースもあるが、標高差が1000mと大きく時間は掛かる。



登山口

駐車場から右は黒岩コース、左はあすなろ山荘コース。あすなろコースは2H30で上れるので、やや長いが黒岩コースを選択。

荒れた林道を進む。小一時間で林道を離れ、山道に入る。

このコースは、歩かれていないらしく荒れていた。

周りは、ヒノキアスナロで覆われていた。この樹は、ヒバとも呼ばれるが、関東以北から渡島半島に多く分布するという。

静岡のヒノキに比べ、葉が大きく太くガッシリしている。



大船渡方面

ひと踏ん張りで稜線に出た。ひざ下の笹が一面広がっている。かろうじて登山道が分かる程度。下刈りをしないと数年後に登山道は埋没しそうだった。グングン上って行くと、右から大沢コースが合流した。ハクサンシャクナゲが出て来た。満開で今が見ごろだった。樹林帯を抜けたのでモーレツな風が吹く。幸い雨は降っていない。この風は、台風崩れの前線の影響だろうか。最も、後で分かったことだが、広大な頂上一帯は大きな樹木が全くなかった。冬はもとより、一年中、西・北風が強いのではないか。

花崗岩の巨石帯を上る。左からモーレツな風が吹く。ややもすると吹っ飛ばされそうだった。小ピークに達した。期待の黒岩かと思ったが違って、ガッカリしてしまった。兎に角、この強風から早く逃れたかった。ぶっつけ本番で来たので、資料が少なく、頂上から駐車場に戻れるか、一抹の不安があった。仮に登山コースを、また下ることになったら、エライことになる。やっと黒岩着。やれやれだった。



黒岩上り

相変わらずモーレツな風。霧の向こうに鳥居が見えた。しかし、頂上ではなかった。五葉山神社だった。大きな石造り立派な社だった。少し下って頂上に向かう。この辺りは、正にシャクナゲの海・海・海・海だった。シャクナゲは、天城の様にヒョロヒョロした高木でなく、大きな盆栽風なシャクナゲだった。恐らく、前述した年中の強風で、矮小化しているのだろう。しかし、その光景は半端でなかった。こんなシャクナゲがこの世にあったのかと絶句した。

遮るものが無い、頂上一帯の平原は、更にモーレツな風。まともに進めない程だった。高い樹木もシャクナゲが無かった。ようやく頂上に辿り着いた。長かった。晴天ならそんな感じはなかっただろうが、悪天候がそうさせたのだろう。標識にタッチしてすぐ下山。五葉山神社から松山に下るルートがあって良かった。急下降でバンバン下る。神社の標識があったが、分からなかった。下り切ると駐車場からの林道の終点で、「あすなる山荘」があった。大きく綺麗で中央に薪ストーブがあった。入り口には薪が山積みされていた。冬はさぞかし楽しそうな感じだった。

林道を下ると駐車場着。長居は無用ですぐ下る。下って、もう1峰の考えもあったが、天気は相変わらずハッキリしない。おとなしく帰静する。ま、いろいろあったが、全体的には満足しうる山行だった。

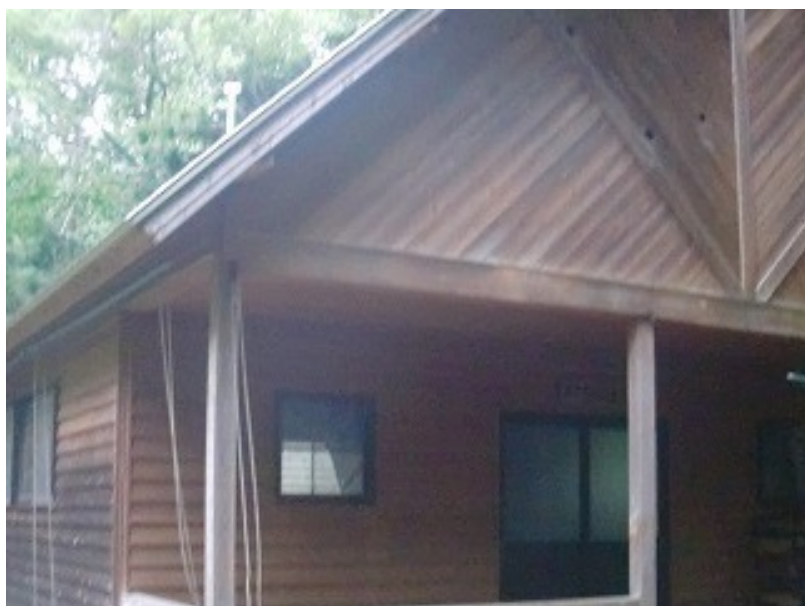


シヤクナゲの海

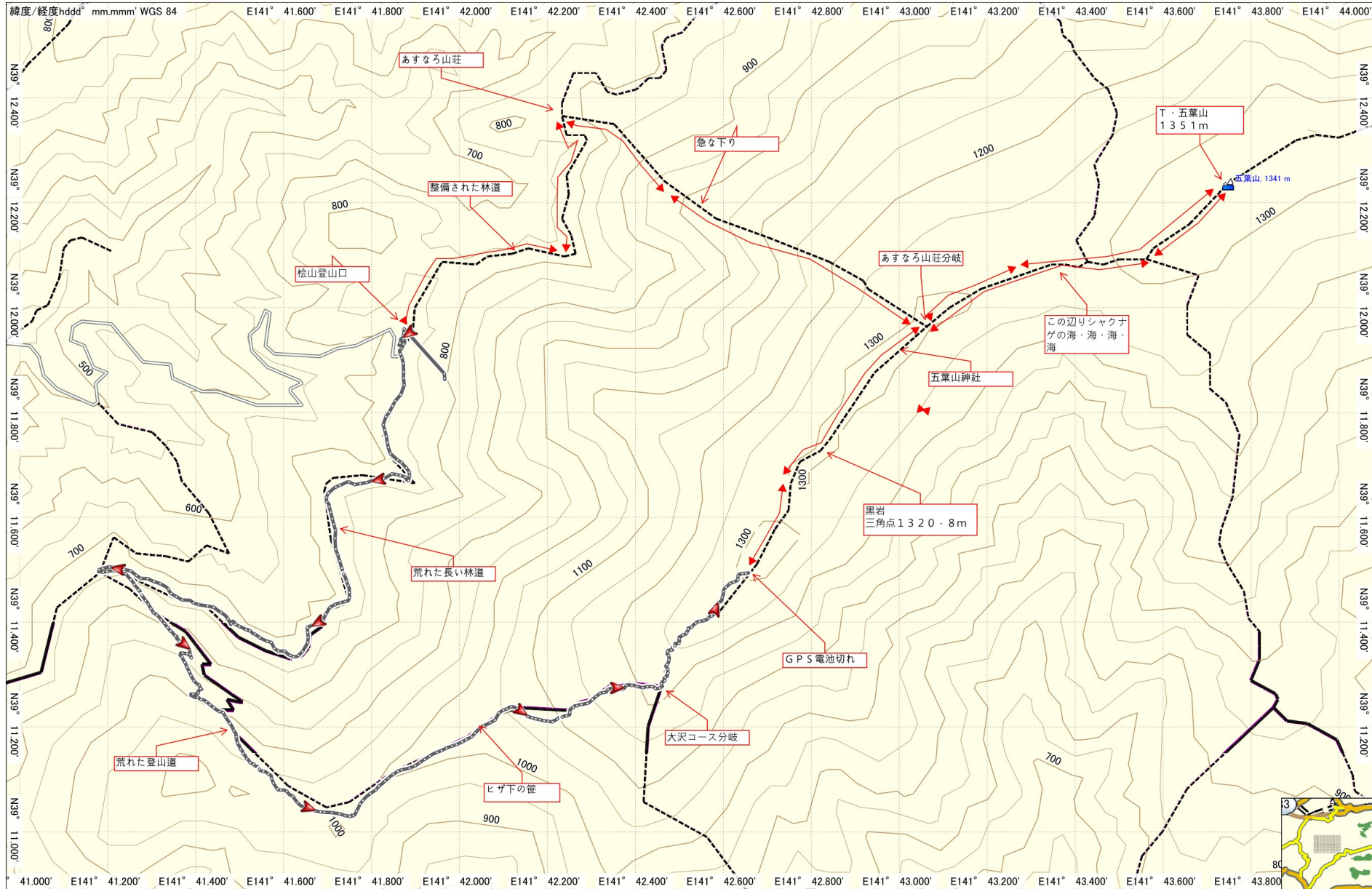




頂上標識



あすなろ山荘



Japan Topo 10M Plus V3
 Copyright © Garmin Co., Ltd 2014
 Garmin Corporation 1995-2014

マイコレクション



GARMIN

